
もう1つの本庁恋物語 由美視点

月島秋香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1つの本庁恋物語 由美視点

【Nコード】

N7596H

【作者名】

月島秋香

【あらすじ】

宮本由美は千葉刑事に片思い中。ところが、いきなり避けられて・
・本庁のもうひとつの恋の行方は？

（前書き）

千葉刑事と由美さんのラブストーリーですが、アニメにはないカットプリングですので、ご注意ください。また、登場人物のキャラが激しく違います。イメージを壊したくない方は読まないでください。これを読んで、コナンの原作・アニメを愛好していくのに影響が出たとしても作者は一切の責任を負いかねます。自己責任でお願いします。

警視庁交通課勤務の婦警、宮本由美は、仕事を終えた夕暮れ、捜査一課の部屋に向かっていた。

親友の佐藤美和子に会うため―でもあつたが、何より、片思い中の相手に会いたかった。捜査一課の刑事で美和子の恋人、高木渉の親友でもある、千葉に。

小走りに廊下を行き、一課の部屋を覗くと、そこは相変わらず閑散としていて。美和子も、千葉もいなかった。

かわりにいたのは高木渉で。たったひとりの一課の部屋でコーヒ―を飲みながら、書類に目を通していた。

自分に気付くと、

「あれ？由美さん？」

と手をあげ、にこにここと笑う。

「やあ。ひとり？美和子は？」

由美も片手をあげてみせ、尋ねる。

「すみません。佐藤さんは、3丁目で起きた事件の聞き込みに回っていて、いないんですよ」

すまなそうに言ってから、

「本当は、千葉の居場所が聞きたいんじゃないですか？」 驚いた。千葉への片思いは高木にも、美和子にも、誰にも言っていないかったから。

驚いたのが顔に出たらしく、高木が苦笑して、

「見ていればわかりますって。由美さん、千葉が好きなんですよ？」

由美は頬に血がのぼるのがわかった。

（・・・もう、参ったなあ、鋭いわねえ）

由美はどう誤魔化そうかと考えていたが、観念したらしく、

「・・・絶対、本人には黙っててよね？」

と念を押して、

「・・・好きよ」 次の瞬間、高木がハツと顔をあげ、

「千葉。仕事、終わったのか？」

えっ？

振り返ると、確かに千葉のまるい身体が部屋に入ってくるところだった。

「・・・おう。さっきな」

（ま、まさか、今の聞かれなかったわよね！？）

慌てて、千葉に駆け寄り、

「千葉くん、もしかして、今の聞いてた？」

千葉は、びつくりしたように、

「俺、今、帰ってきたばかりで。何の話してたんすか？」

由美は内心ホツと胸を撫で下ろし、

「いいのよ。聞いてないなら。―それよりさあ」 それから、ドラ

マや仕事のグチ、いつものように美和子とのことで高木をからかったり、他愛ない話へと変わったが。

千葉が何処か上の空で、寂しそうに見えたのが、由美には気になった。

翌朝。

廊下で千葉と顔を会わせたので、

「千葉くん、おはよ」

明るく挨拶して、

「ねえ、今夜、飲みに付き合いなさいよ」珍しいことではなかった。

高木と美和子の親友だということであたりが付合うようになる前から4人で集まる機会が多く、お互いの親友が付合いだしてから千葉とふたりで会うことも多くなっていたからだ。

千葉は、切なそうな、怒ったような、由美を責めるような瞳をした。けれど、それは一瞬で。

「すみません。新しい事件を担当することになって、しばらく時間

が取れないんすよ」

由美はがっかりしたが、仕事柄、今までもこういうことは何度かあった。

「そっか、仕方ないわね。仕事、頑張んなさいよ」

と笑って、自分も交通課へと戻っていった。

しかし、昼休み、美和子と一緒にになり、昼食をとるレストランへと向かう途中、何気なく朝のことを話した。

美和子は驚いたように、

「千葉くんが、新しい事件を担当することになった？」 美和子は驚いたように訊いてから、腕を組み、首を傾げた。「変ね。彼、事件の裏付けを取る段階でそれもほぼ確定してるはずよ。込み入った事件は抱えてなくて比較的手が空いてるはずなんだけど」 由美は、昨日、千葉が上の空だったこと、今朝の自分を責めるような瞳、そして今の美和子の話―繋ぎ合わせて考えると千葉が自分を避けているという、残酷な結論を出さないわけにはいかなかった。（どうして！？私、何かした！？）

胸が張り裂けそうに痛かった。心の中で叫んでみても、千葉に届くわけもなく。

このままだったら泣き出してしまっだろう。

「美和子。ごめん。あたし、仕事、思い出して。悪いけど交通課に戻るわ。ランチはひとりで行って」

目をまるくしている美和子に、くるりと背中を向けて駆け出した。

（早く、早く、人気のない所に行かなきゃ）

屋上まで階段を駆け上がると、うずくまって、泣き出した。

「由美！」

美和子の声だ。

「どうしたのよ？」

美和子は答える余裕もなく、泣きじゃくっている由美の肩を抱き、

「泣いてたってわからないでしょ？私でいいなら相談くらい乗れるけど？」

美和子の優しさに、ようやく涙が止まり、声を詰まらせながら、昨日からのことを全て話した。

「・・・由美。私は千葉くんじゃないから、どうして彼がそんな嘘をついたのか、答えは教えてあげられない。答えが知りたいなら、千葉くんに直接聞かなきゃ」 至極当然なことを美和子は口にした。

「そんなことはないと思うけど、万が一でも、由美にとってはもっと怖いことが待ってるかもしれない。悲しい思いするかもしれないだけ。それでも彼の気持ちを知りたいと望むかどうかよ。それは由美が決めなきゃ」

それから、いつそう優しい声になり、

「私もね、高木くんの気持ち知るまでは不安だったもの。私なんて何とも思っていないんじゃないかとか他にふさわしい人がいるんじゃないかとか。だけど、思い切って話して、気持ちを知れて、今は幸せだわ。でもね、それは勇気を出したからだと思ってる。本当に思ってくれてると知るまでは怖かったけどね。由美も、勇気を出してアタックしなさいよ」

美和子の言葉が心にしみていく。

勇気を出してアタック、か。

とりあえず、どうして私を避けてるか、知りたい。

嫌われたのかもしれない。

怖いけど、こんな所でいつまでも泣きべそかいてるなんて、由美さんらしくないものね。

由美は決心した。

涙を拭くと、親友に

「サンキュ」

と笑った。

由美は、仕事が終わった後、駐車場の、千葉の車の前で、千葉

を待った。

1時間ほど経った頃だろうか。千葉が、車に向かって歩いてくるのが見えた。

驚いたような顔になる。

「千葉くん。話があるの」

「由美さん。俺、ちよつと時間が―」

由美は、千葉をキツと見つめて、

「時間がないとは言わせないわよ。美和子から聞いたもの。千葉くん、込み入った事件なんか抱えてなくて、手が空いてるってね」
言うのも辛かった。

そんな嘘についてまで、自分を避けてるって現実を突きつけられる。

これ以上続ければはつきりと言葉で聞くことになる。

怖かった。

だけど、逃げちゃだめだと、自分を奮い立たせる。

そして、真っ直ぐに千葉を見つめ、

「そんな下手な嘘までついて避けられなければならないほどのこと、私はしたんでしょう？」

「・・・そんなこと」

千葉は、否定しようとする。

「・・・お願い。理由を聞かせてよ。私が何かしたなら謝るから」

千葉はしばらく目を伏せて、黙り込んでいたが、そのまま、呟くように、

「・・・俺は、高木の代りなんて御免です」　しばらく、沈黙が落ちた。

由美には、言われている意味が理解できず、とっさに反応できないための沈黙だったが、千葉はそれを肯定と受け取ったらしい。

「・・・やっぱり、否定してくれないんですね」

自嘲気味に笑った。

由美は、

「意味がわからないわよ！どうして、千葉くんが高木くんの代わりなの！？」

由美は悲鳴のように叫んだ。

「・・・まだとぼける気なんですか？由美さんが一緒にいたいのは高木でしょう」

違う。

何かあったとき、何もなくても、いちばんに会いたいのは、一緒にいたいのは、あなただけなのに。心の中で叫んだ。

だが、千葉の言葉は続いている。

「だけど、高木には佐藤さんがいるから。だから、高木を誘いたいときに俺と一緒にいたんでしょ？」

千葉の顔が悲しげに歪んだ。

「馬鹿にしないでください。俺だって傷つくんですよ」

もう、黙ってられなかった。

どうして、そんな誤解をしたのかはわからないが、今、誤解を解かないと大変なことになる。取り返しのつかないことになると思った。

「馬鹿にしているのはそっちじゃない！」

言葉を叩きつけるように叫んだ瞬間、由美の目から涙が溢れ出した。「私はね、会いたきゃその人を誘うし、ましてや、誰かを身代わりにしたりなんて絶対にしない。私の気持ちを、そんなふうに言わないで！」

涙が次から次へと溢れてくる。

「私はね。千葉くんに会いたいから千葉くんを誘ったの。いつだって、会いたいのは、一緒にいたいのは、千葉くんなのよ」

千葉は、戸惑うように、

「・・・だって、由美さん、昨日」

「昨日？」

「高木に好きだって言っていたじゃないですか？」

由美は昨日のことを思い返し、思い当たった。

一課の部屋に行ったとき、高木に千葉が好きなんだろうと言われて、好きだと答えた。

千葉が姿を現したのは直後である。

つまり、あの会話の最後の部分だけを聞いて、自分の高木への告白シーンと誤解したのだ――と。

そう理解すると、おかしくなって、笑いだしてしまった。

「馬鹿ねえ。あれは高木くんに千葉くんを好きなのかって訊かれたから肯定しただけよ」

「ええ!？」

「いい加減にしてよね」

「す、すみません」

そこで、由美は、まだ告白の返事を貰っていないことに気付き、

「で、千葉くんは？」

「え？」

「千葉くんは、私のこと、どう思ってるの？」

千葉は、突然、由美を抱き締めた。

「ちよつ、ちよつと、千葉くん!？」

こんなときなのに、大好きな人の匂いとぬくもりに包まれて由美の胸が高鳴った。

「佐藤さんを心配して、応援してるところ。元気で、場を盛り上げてくれるところ。笑顔が可愛いところ。由美さんが笑ってくれると、どんなに疲れててもまた頑張ろうって思えるし、どんなにひどい事件の後でも由美さんと話していると、人間って捨てたもんじゃないって思えるんすよ。何か大げさですけど」

照れ臭そうに、

「だから、由美さんとふたりで会えるようになったとき、嬉しかったし。昨日から高木に嫉妬して。さっきもあんなひどいこと。すみません」

由美の長い髪をすきながら、

「あんなひどいこと言ったんですから。本当は気持ちを伝えることすら図々しいんだろうけど。俺は由美さんが好きです。由美さんと一緒にいたいです」

せっかく止まった由美の目からまた涙が溢れた。

でも、これは、嬉しい涙、幸福の涙だ。

「これから先、何があったって由美さんを守ります。もう泣かせませんから。だから、俺と付合ってくれませんか？」

由美は、愛しい人、これから恋人という呼び名の関係になる人の腕の中で、泣きながら笑顔を浮かべて頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7596h/>

もう1つの本庁恋物語 由美視点

2010年10月26日05時43分発行